様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２０７７

研究課題名（和文）移民児童に向けたICT学習支援国際ネットワークを確立するためのアクションリサーチ

研究課題名（英文）Action Research on Building the ICT Learning Support System toward Immigrant Children

研究代表者
小澤　亘（OZAWA, WATARU）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：３０２６８１４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ユニバーサルデザインのデジタル図書規格であるDAISYを使用して、移民受入国（日本）・送出国（ブラジル）における大学がハブとなって、両国言語による多言語DAISY教科書（東京書籍小学校国語教科書30単元）を制作するグローバル支援ネットワークを構築した。ICTを活用して、日本語教育と母語教育を同時に進める教育教材資源・教育方法・教育環境等の在り方を追究するとともに、多様な外国人児童生徒の状況やニーズに対応させたICT教育ツールの活用方法について探究した。多言語DAISY教科書は、サンパウロ大学と共有化し、ブラジルの大学における日本語教育にも寄与・貢献できることを明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
外国人児童生徒の教育問題は、1990年代末より日本におけるマイノリティ研究の重要課題となり、社会学研究が試みられてきたが、いずれも国内政策の検証に留まった。本研究では、国境を越えた国際的な問題として位置づけ、ICTの特性を活かし、グローバルな学習支援ネットワークの構築を目指したが、この研究領域において新しいアプローチをもたらしたと言える。移民受入国・送出国の間に支援ネットワークを構築して、多言語DAISY教科書を制作するプロジェクトは、世界でも初めの試みであり、移民を受け入れた日本社会におけるICTを活用した日本語教育と母語教育、送出国側の日本語教育の双方に貢献できることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：We have undertaken a project to build a global learning support network between Japan and Brazil, with the aim of producing multilingual DAISY textbooks in both Japanese and Portuguese. These textbooks are based on Elementary School Japanese Language Textbooks. DAISY is a universal design digital book standard. In each country, the university served as a hub for international networking. We have also explored ways of using ICT educational tools that can be adapted to various challenges that the immigrant students might face. Multilingual DAISY textbooks have also been shared with the University of Sao Paulo. These digital textbooks have been validated to be effective toward their contributing to Japanese language education in Brazilian universities.

研究分野：社会学

キーワード：多言語DAISY教科書　グローバル支援ネットワーク　アクション・リサーチ　外国にルーツを持つ児童生徒　帰国児童　日本語教育　母語教育・母語維持　ICT

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

外国人児童生徒の教育問題は、1990 年代末より日本におけるマイノリティ研究の重要課題の１つとなり、駒井洋、宮島喬、太田晴雄、佐久間孝正らの社会学研究により、国内課題として政策が検証されてきた。2008 年リーマンショック以降、母語習得が不十分なまま帰国した日系人児童生徒の社会不適応問題が母国側で生じると、マイノリティ児童生徒に対する教育問題は、改めて国境を越えたグローバルな問題として顕在化した。そこで、申請者は、グローバル化の進行に伴って生じた移民受入国・送出国の双方の社会問題に対して、時間と空間を乗り越えられる ICT（情報技術）の特性を活かして、グローバルな学習支援ネットワークを構築することによって、問題を乗り越えようと考え、実践研究を推進してきた。

教科書バリアフリー法（2008 年制定）によって、マルチメディア DAISY 教科書等の音声教材（DAISY とは、Digital Accessible Information System という文章・音声・画像を統合したデジタル図書規格）が読み書き困難児童生徒に対して配布されるようになったが、2024 年 5 月時点に至るまで、外国人児童生徒はその対象外とされてきた。こうした点も一要因となり、公教育において ICT を活用した外国人児童生徒に向けた学習支援研究は進んでこなかった。

２．研究の目的

本研究は、(1)グローバルな支援ネットワークに依拠して、多言語 DAISY 教科書を制作するとともに、ICT を活用した外国人児童生徒に対する学習支援方法を探求すること、(2)アクションリサーチを通じて、学校関係者を含むアクターと協働しながら、多文化共生社会の構築に向けた文化的・社会的な課題を明らかにすること、(3)多言語 DAISY 教科書を移民送出国（本研究の場合、ブラジル）においても有効活用していく方途を見出し、グローバルな ICT 学習支援ネットワークの構築がその双方の国にとって、メリットがあることを検証することである。

本研究では、ユニバーサルデザインのデジタル図書規格として開発されたマルチメディア DAISY 図書の可能性に着目して、移民受入国・送出国における大学がハブとなって、両国の言語による多言語 DAISY 教科書を制作する体制の構築を目指す。ジム・カミンズの先行的な研究を基盤として、ICT を活用して、日本語教育と母語教育を同時に進める教育教材資源・教育方法・教育環境等の在り方を追究するとともに、多様な外国人児童生徒の状況に応じた ICT 教育ツールの活用方法について探求する。多言語 DAISY 教科書は、移民送出国の教育機関（今回は、サンパウロ大学の日本語教育コース）と共有化し、送出国側の日本語教育にも寄与・貢献できることを明らかにする。さらに、取り扱う母語の多様化も追究する。

３．研究の方法

フィールドワーク実施校としては、関西の公立小学校 3 校において、日本語学習で困難に直面する日系ブラジル人児童生徒 6 名に対して、ICT を活用した学習支援方法を追究するアクションリサーチを実施した。母語（ポルトガル語）・日本語を併用した多言語 DAISY 教科書を連携するブラジル・サンパウロ大学 DAISY プロジェクトの協力を得て開発・制作した。

支援対象児童に対しては、定期的に、STRAW-R 調査、DEM 調査、レーブン色彩マトリックス検査、ATLAN 語彙力検査、自尊心調査、必要な場合は視線追尾検査等によってアセスメントを実施した。学校側・担当教諭ならびに支援対象児童・保護者に対して、アセスメント調査結果を共有化しながら、支援効果の検証を行い、教材開発と支援方法の改善に繋げた。

サンパウロ大学 DAISY プロジェクトと連携して開発・制作した多言語 DAISY 教科書は、インターネットサイト rits-daisy.com を通じて、日本国内で共有化するとともに、ブラジル側では、サンパウロ大学の日本語教育での活用を試みた。その効果については、参加学生等からのアンケート調査により評価した。

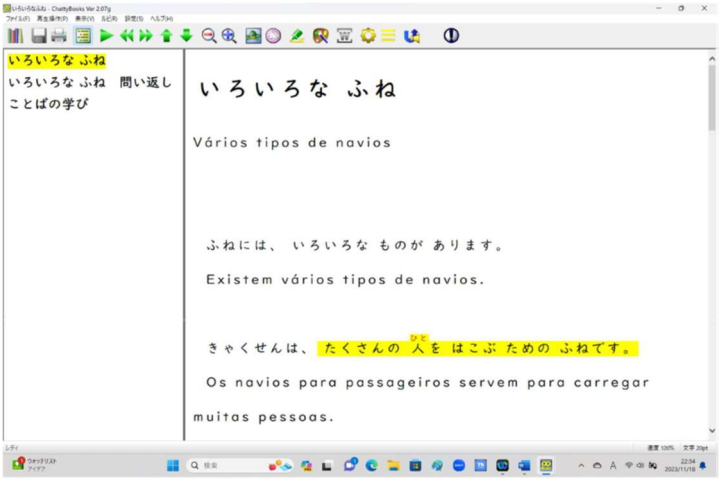
一連のアクションリサーチによる移民児童生徒に対するグローバルな学習支援ネットワークで、関連するアクターを図式化しておくと、右図のようになる。さらに、他の言語においても、同様の多言語 DAISY 教科書の制作可能性を追究した。

４．研究成果

(1) 多言語DAISY教科書の制作

試行的に制作したのは、東京書籍小学校国語教科書の1年生から6年生までの単元から精選した30単元のポルトガル語・日本語併記の多言語DAISY教科書である。翻訳は、日本に滞在する日系ブラジル人研究者、サンパウロ大学で日本語を学んだ院生・卒業生らが協力し、サン

パウロ大学ハシモト・リカ教授が監修した。
　本プロジェクトを開始するに先立って、2018年3月に、プロジェクトメンバーの小澤と楠がサンパウロ大学を訪問。日本語コースで学ぶ学生たちを対象に、DAISY講習会を実施した。その際に、ハシモト・リカ教授（日本語教育）、キクチ・ワタル准教授（日本文化研究センター）を中心に、学生数名を含むサンパウロ大学DAISYプロジェクトが立ち上がっている。



　多言語DAISY教科書制作当初は、ポルトガル語音声は、ブラジル人の発音に近い合成音声を使って日本側で制作し、上記サイトにアップロードした。その後、サンパウロ大学側から、合成音声では不自然な箇所があると指摘を受け、肉声録音への変更を目指すことになった。これに加えて、単元用語を日本語・ポルトガル語で併記して説明する「ことばの学び」を各単元末に付加することにした。これは、日本滞在が長くなった児童生徒が学年が上がるとともに、ポルトガル語理解が難しくなるケースが多く、「ことばの学び」が母語学習・母語維持の両面において不可欠と判断されたためである。
　しかし、この修正作業の間にコロナ禍が世界を襲い、連携プロジェクト活動もしばらく停滞した。制作していた全単元で、ポルトガル語肉声録音と「ことばの学び」付加が完成し、上記サイトアップできたのは、結局、本プロジェクト最終年度2023年9月となってしまった。
　それから半年間、東京書籍小学校国語教科書を使用している地域の教育委員会にメール・FAX等によって情報提供を試みたが、4年ごとの教科書改訂に伴う教科書選定時機に当たっていたこともあり、残念ながら教育委員会からの積極的な問い合わせや反応等は乏しかった。
　さて、上記サイトからの多言語DAISY教科書配布は、2020年9月から順次アップロードしたが、全点をアップロードできたのは、2021年9月からとなった。各年度とも、新たな使用者は、十数名に留まった。国内普及の阻害要因としては、ポルトガル語音声の質向上が遅れたことや広報活動の不徹底もあるだろうが、最大の要因は、サイトからファイルをダウンロードしたうえで、再生ソフトで利用するという提供方法の煩雑さにあったものと推察される。
　今回の提供方法は、rits-daisy.comに多言語DAISY教科書提供ページを付加し、著作権保護等の使用に関わる注意事項に同意した者に限定して、IDとパスワードを発行。IDとパスワードの入力により、ダウンロードページに移行し、利用者が必要な単元の多言語DAISY教科書ファイルをダウンロードして、再生アプリ（再生方法等の説明文書はページから見れるようにした）で読んでもらうという流れであった。ギガスクール構想に基づき、小中学校で使用されるようになったPC等の端末は、記憶容量が十分でない場合が多く、また、こうした一連のファイル利用のための作業手順が煩瑣だったことなどが、使用者側にとって障壁となっていたことが、2023年9月以降の学校関係者のインタビューで明らかとなった。
　今後の提供方法としては、IDとパスワードの発行の流れは著作権保護の観点から欠くことができないが、多言語DAISY教科書ファイルを表示したページから、ワン・クリックでブラウザー上で直接再生できるようにする予定である（ただし、インターネット接続は必須）。これにより、再生に関わるストレスを減少させることができるとともに、ファイルダウンロードは行わないために、著作権保護を徹底できることになる。

(2) 日系ブラジル人児童生徒に対するICT学習支援
　関西の公立小学校3校において、総計、6名の日系ブラジル人児童生徒に対してICT学習支援を試みた。それぞれの支援活動について報告する。
　　① 公立X小学校の場合
　2019年11月より2021年2月まで、児童A（5年生末から6年生に至る1年余り）、児童 B（3年生末から4年生に至る1年余り）、2020年6月より2021年2月まで児童 C（1年生の半年余り）、合計3名を支援した。3名は日本生まれの日系ブラジル人姉妹で、両親とも日系ブラジル人、日本語は不得手で、家庭ではポルトガル語が使用されていた。「いーリーダー」（シナノケンシ社製）をインストールしたiPadを一人1台ずつ貸与し、多言語マルチメディア DAISY教科書（支援初期においては、紙媒体でポルトガル語翻訳併記の教科書単元プリントを配布）およびマルチメディアDAISY教科書（ディスレクシア児童生徒用判定検査により、読み困難度が相当に高いことを確認したうえで申請した）を使用して、週1回、放課後時間帯に普段の教室とは別室で学習支援を実施した。やさしい日本語を用いた予習復習ワークシートを作成し、可能な限り先行学習を追求した。児童生徒が単元の内容理解を予め進め、授業で求められる課題を理解できるようにすることによって、授業中のストレスを減少させることが

でき、学習意欲の向上に繋がった。2019年12月と 2020年9月に、改訂版標準読み書きスクリーニング検査(STRAW-R)に含まれる音読・書き取りの正確性検査、ATLAN（適応型言語能力検査）中の語彙能力検査、東京都版自尊感情検査、学習支援に対する印象等の4種のアセスメントを実施した。2021年2月、急遽、両親の都合で愛知県に移住・転校したため、支援は終了した。

児童Aは、2019年12月の5年生段階では、STRAW-R検査のひらがな・カタカナ単語の読みの正確性検査で、それぞれ18/20、16/20と-2SDレベルと日本語能力はきわめて低かったが、2020年9月の検査では、いずれも、20/20と改善した。しかし、漢字単語の読みでは、学年が上がったため、13/20から6/20と低下しており、ATLAN語彙検査では、いずれの検査も40点で変わらず、小学校3年生中位レベルに留まった。高学年に至ってからの支援開始であったために、読み書き能力に問題は残ったが、支援に対する印象等を聞いた検査から見ると、学習意欲を高めることはできていた。

児童Bは、ひらがな・カタカナの読み書きに困難は無かったが、漢字の書き検査では−2SDレベルに留まった。これに対して、ATLAN語彙能力検査では32点から40点に上昇し、小学校1年生中位から小学校3年生中位（4年生時点）まで力を付けている。国語の単元テストでも、100点を取れることもあり、学習意欲はかなり高まった。日本人の友人との交流も豊かで、そうした生活環境が語彙能力の向上にも貢献したものと推察される。

児童Cは、ATLAN語彙能力検査では23点（1年生時で幼稚園年長レベル）であるものの、学習支援に慣れるとともに学習意欲は次第に高まった。放課後学習支援を通じて、児童A（長女）が児童C（一番下の妹）の学習支援に携わるという人間関係性を意図的に構築することができたため、双方の学習意欲増進に繋がった。ピア支援学習の重要性が再確認された。

iPadを使用した学習支援では、ひらがな・カタカナ・漢字の学習アプリも多用したが、こうしたICT学習支援により、ひらがな・カタカナの読み書き能力は、急速に向上した。しかしながら、とりわけ非漢字圏から来た外国人児童生徒にとって、漢字の習得にいかに高い壁があるかを改めて実感させられた。

② 公立Y小学校

2021年9月から2024年3月に至るまで、児童D（1年生途中から3年生）をX校と同様な方法で支援した。読み能力アセスメントも半年ごとに実施。ただし、X校の反省に立って、放課後支援は、児童が所属する教室で行った。これにより、頻繁に担任教諭や保護者が同席し、互いに意思疎通を深めながら支援を実施することが可能となった。学習支援の効果を上げていくためには、担当教諭や保護者との良好な関係性の構築が不可欠であることが確認された。

2021 年 9 月の読みの正確性検査では、ひらがなは問題が無かったが、カタカナ 1 文字で 18/20、漢字単語の読みで 15/20。書きでは、ひらがなは問題なかったが、カタカナ 1 文字で 13/20、カタカナ単語で 13/20。漢字単語では 12/20 と-2SD レベルの低調さだった。ATLAN 語彙能力検査では、23 点と幼稚園年長レベルであった。2024 年 3 月になると、ひらがな・カタカナの読みでは問題なし。漢字単語の読みで 18/20 で-SD レベル。書きでは、カタカナ 1 文字で 17/20。カタカナ単語で 18/20、漢字単語で 17/20 と-1.5SD から-2SD レベルではあるものの、力を付けてきている。漢字 126 文字の音読正確性でも、48/126 と 8 歳 6 か月レベルに達している（実年齢は、9 歳 6 か月）。ATLAN 語彙能力検査は 36 点で、ほぼ小学校 3 年生中央値で学年相当レベルにキャッチアップしている。

児童 D における特記事項は、2022 月 2 月に実施した自尊心検査で著しい低下があったことである。2 年生になって、漢字が急に難しくなったこと、公団住宅に引っ越したあと、放課後時間帯に遊ぶ友だちが外国人児童に限定されるようになったことなどが背景にあったようである。3 年生夏休みに、ブラジルに一時帰国したが、その際の体験を聞き取り、アイデンティティ・テキストとして DAISY 絵本化（録音は、児童の声）を行い、クラスメイトに授業時間中に視聴してもらった。こうしたアクションの影響もあって、自尊心レベルは、元のレベルまで高まっている。ICT 学習支援によって、児童 D は順調に力を付けたことは確かだが、2023 年度小学校学力経年調査による実力テストでは、正解率で、算数、国語は、中位から中下位、理科、社会は下位に留まっている。継続的支援が学習意欲の向上に繋がり、一見、日本人児童生徒にキャッチアップしたかに見える場合でも、ディスレクシア児童生徒と比べても、同等以上に、漢字の読み書きや教科学習において困難に直面していることが分かる。

③ 公立Z小学校

2019年10月より2024年3月まで、児童E（2年生末～6年生）、児童F（1年生末～5年生）の2名を支援した。2人ともポルトガル語を母国語とするブラジル人児童であり、両親は日系ブラジル人、家庭言語はポルトガル語であった。また、児童Eは、2019年8月2学年時に来日。支援当初はひらがな・カタカナともに未習得であった。児童Fは就学直前の2019年3月に来日、日本語指導30時間を終えた後でも日本語習得が不十分な状況であった。2人ともiPadを使用して、週 1 日40 分間、別室に取り出し、日本語指導を行った。「DropTalk」「つくるんですOMELET」やひらがな・カタカナ練習用アプリを使用した。2人とも日本語能力の低さのため、多言語DAISY教科書は使用できなかった。児童Eは、こうした支援により日常生活で使用する道具、動物などを中心に語彙数が増え、文章を書くこともできるようになった。児童Fは、助詞の練習、目的語と動詞を用いた文章作りの練習、形容詞、ひらがな・漢字を交えた文章作りなどの学習支援を行った。児童Fは、カードを使用して、ひらがなの読み書きを練

習し、その後、カタカナ練習アプリを使ったカタカナ練習や、「つくるんですOMELET」を使った「大小」などの概念理解の練習に取組んだ。児童Fは、当初は指導者の問いかけに無反応だったが、次第に他者に自分の考えを伝えるようになった。しかしながら、2人とも日本語習得は順調に進まず、高学年になっても、日本語基礎プログラムでの日本語指導を継続せざるを得なかった。

2019年12月から半年ごとにアセスメントを実施したが、STRAW-Rで読み書きの正確性とATLAN語彙力検査が最初に実施できた2022年2月の段階で、児童Fは3年生でカタカナ1文字読み19/20、漢字単語読み15/20、漢字単語書き15/20、ATLAN語彙能力検査33点（1年生中位相当）であったが、2023年12月の検査では、ひらがな・カタカナの読みは平均レベル、漢字単語読みは5/20と-2SD以下ととても低い状態だった。ひらがな1文字書き18/20、カタカナ1文字書き10/20、カタカナ単語書き11/20、漢字単語書き3/20、語彙能力検査34点と停滞、むしろ低下している。児童Eは、2022年2月の4年生段階で、漢字単語読み5/20、カタカナ1文字書き14/20、漢字単語書き5/20、ATLAN語彙能力検査で18点（幼稚園年少レベル）であった。2023年12月6年生段階になっても、ひらがな単語読み18/20、カタカナ単語読み19/20、漢字単語読み0/20、カタカナ単語書き16/20、漢字単語書き0/20、そしてATLAN語彙力検査は27点（小学1年生レベル）に留まった。ICT学習支援を特別支援教育専門家が工夫したが、学校生活やクラスへの適応は支えられたものの、日本語習得では厳しい状況が続いている。

(3) サンパウロ大学における日本語教育での活用

サンパウロ大学教育学部で、「日本語上達のための多言語DAISYミニコース」を2022年10月4日から11月29日まで、週2講、合計30時間で開講した。担当は、教育学部アレクサンドラー・ジョヴァノヴィヴィック講師と哲学・文学・人間科学部東洋言語学科日本語・日本文学講座ハシモト・リカ教授。受講生は6名だった。

「サラダでげんき」「かんじのはなし」「としょかんはどんなところ」「おおきなかぶ」など、多言語DAISY教科書の1・2年生の単元テキストを使用。受講生はネイティブスピーカーの録音音声でテキストを2、3回聞いて、音素、語句を学習でき、リーディング ポイント（間）やイントネーションを正確に習得でき、学習意欲は高まった。

教員・受講生の振り返りコメントとしては、「より高度なレベルの人は、3 ～ 5 のフレーズを聞いて一度に正しく再現できましたが、言語の知識があまりない人は、聞き取りスピードを選択して、ゆっくりとしたペースで 1 行ずつ繰り返しながら自分なりのリズムで勉強することができました」「多言語DAISY教科書など、さまざまな教材を使用することはマルチレベルの学習に有益であり、日本語能力レベルN5、N4でも読解、書く能力や会話において日本語が上達しました」と好評だった。

(4) 今後の展望

移民受入国・送出国の間にグローバルICT支援ネットワークを構築して、多言語DAISY教科書を制作するプロジェクトは、世界でも初めての試みであり、今後、大きなインパクトを与えていくものと思われる。今後の課題としては、以下5点を挙げることができる。

① 今回、多言語DAISY教科書では試行的にポルトガル語を取り上げたが、引き続き、スペイン語版・中国語版を加え、日本語指導が必要な外国人児童生徒の半数余りを対象として、多言語DAISY教科書（東京書籍小学国語教科書の1年～6年向け30単元程度）を配布する予定である。その配布方法も先に指摘したように、rits-daisyサイトページからワン・クリックでブラウザー上で再生できるようにする。これにより、国内での普及活動を促進させていく。
② ブラジル国内における多言語DAISY教科書の大学日本語教育での実施に目途がついたことから、今後は、初等中等教育課程における日系学校での日本語教育への普及を進める。
③ 多言語DAISY教科書によって、日本における移民児童生徒の母語維持教育・母語教育を本格化させていくためには、現状の著作権法上の制約を乗り越える必要がある。つまり、著作権法37条第3項の対象に「日本語に通じない児童生徒」を加える法改正は必須となるだろう。こうした法環境等の社会システム変容に対する働きかけも次なる課題となる。
④ 今回の支援活動で明らかとなった点は、外国人児童生徒が直面する困難度やニーズがきわめて多様であり、多言語DAISY教科書を含め、DropTalkや「つくるんですOMELET」、既存の学習アプリを、適宜、組み合わせて活用することの重要性である。また、多言語DAISY教科書に加えて、予習復習に向けた自習ワークシートを提供することも必要となる。こうした多様な支援ツールの組み合わせに関しても研究を進め、情報提供していく必要がある。
⑤ ようやく、「教科書バリアフリー法」の対象者として、「日本語に通じない児童生徒」を加える法改正が進んでいる。マルチメディアDAISY教科書等の音声教材を外国人児童生徒が使えるようになることは、マイノリティ学習支援において大きな状況改善をもたらすことになる。こうしたICT教育への注目を基盤として、次なるステップとして、多言語DAISY教科書をより多くの移民児童生徒の母語で制作していくこと、それでも対応しきれないマイノリティ児童生徒の母語教育・母語維持については、ICTを活用して人的支援ネットワークを構築していくことなどを工夫していくことを国の政策として位置づけていくべきであろう。このような社会・教育制度を具体化し実現できるよう、さらに実践的研究を進展させていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 岡本　尚子	４．巻 59巻4号
２．論文標題 算数文章問題における場面を想像できることの重要性ー日本語指導を必要とする児童を対象とした事例研究ー	５．発行年 2024年
３．雑誌名 立命館大学産業社会論集	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小澤亘	４．巻 57巻1号
２．論文標題 外国にルーツを持つ児童生徒の学習権をいかに保障するか―立命館大学 DAISY 研究会（Rits-DAISY）の挑戦	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立命館産業社会論集	６．最初と最後の頁 15-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 今枝史雄、小澤亘、福井喜章、楠敬太、浜田麻里
２．発表標題 外国籍の児童に対する音声教材を活用した日本語指導と今後の展望 ―実態把握に基づく提案を通して―
３．学会等名 日本LD学会第31回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡本尚子
２．発表標題 日本語指導を必要とする児童の算数文章問題遂行時の課題－視線計測データを中心に－
３．学会等名 第35回日本保健福祉学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 今枝史雄、金森裕治、楠敬太、小澤亘、福井喜章、河村宏
２．発表標題 外国籍の児童に対する音声教材を活用した日本語指導－日系ブラジル人児童を対象に
３．学会等名 日本LD学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 齋藤ひろみ、小澤亘、浜田麻里、池上摩希子、築樋博子、横溝亮、櫻井千穂、内田千春、中川祐治、村澤慶昭、高橋登、今井むつみ	４．発行年 2022年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 112
３．書名 外国人の子どもへの学習支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

立命館大学DAISY研究会 https://rits-daisy.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡本　尚子 (OKAMOTO NAOKO) (30706586)	立命館大学・産業社会学部・准教授 (34315)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	楠　敬太 (KUSUNOKI KEITA) (70770296)	大阪大学・キャンパスライフ健康支援・相談センター・特任研究員（常勤） (14401)	
研究分担者	今枝　史雄 (IMAEDA FUMIO) (70824118)	大阪教育大学・教育学部・講師 (14403)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関